

基本介護技術の習得過程

The acquisition process of the basic care skill

武田啓子

Keiko Takeda

日本福祉大学

Nihon Fukushi University

takeda@n-fukushi.ac.jp

Abstract

This study reports an effect of the class practice that took in pre-practice.

Care assessment is necessary to take care of it to the state of a person needing care. So I introduced pre-practice to think about from evidence to learn care assessment by a class. As a result, the care skill evaluation of the year when I carried out pre-practice improved. It was suggested that meta recognition activity of the care assessment was promoted by doing pre-practice.

Keywords Care skill, Care assessment, Pre-practice, Meta recognition

1. はじめに

介護福祉士養成課程で学生が習得する「介護技術」は、現場で応用技術として展開するための基本介護技術に相当する。それは、利用者の状況に対応して介護アセスメントが行えるよう、科学的な根拠に裏付けられた技術である。そこで、学生自ら介護アセスメントの考え方を活用しやすい授業デザインとして、「プレ演習」を導入した。筆者のこれまでの報告（武田，2008）では、プレ演習がその場での学習活動を活性化することがわかっている。今回、プレ演習がその後の演習や実技試験の成績に及ぼす効果を確かめたところ、その効果が認められた。

プレ演習の概要

従来の授業は、講義を受けた後に演習する。プレ演習は講義や演習を受ける前に、学生同士（2～4名）で基本介護技術を考え試す場とした。学生は新規項目の課題に対して、実際に介護物品を使い、利用者役や介護者役をしながら方法を考える。その過程で根拠をふまえて方法を導く介護アセスメントを活用することを重視した。

2. 研究目的

基本介護技術を現場で応用するために、学生自身による知識構成やメタ認知活動を重視し、それを協調的に行う、という2点をプレ演習として授業に取り入れる。その有効性を定量的アプローチにより確かめ、探索型学習による基本介護技術習得の学習過程を検証する。

3. 研究方法

筆者が属する介護福祉士養成課程1年生対象の2008年度「介護技術」に、「プレ演習」活動を通年30回の中、11回（項目）導入し、介護に必要なアセスメント力の習得につながるかを、プレ演習を行わなかった2007年度の成果と比較した。受講生は2007年度が25名（専門課程）、2008年度は29名（4年制大学）であった。

演習中の様子はICレコーダーによって記録し、演習中の発話、行動を分析して演習中の学習過程を追った。他、プレ演習後同じ日に行われた講義と1週間後の演習での学習内容を検討して直後の成果を見た。また、年間を通して、中間および期末の筆記試験と実技試験の成績を検討し、プレ演習と講義、演習で学んだことの定着率を検討した。

事前に対象学生には研究の趣旨を説明し、承諾書の提出をもって、同意を確認した。

4. 結果

1) 実技および筆記試験結果

全ての項目で2008年度の合格率が向上し、プレ演習導入の効果が筆記、実技試験成績双方に認められた。

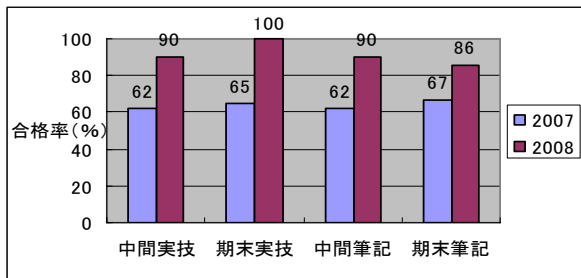


図1 試験結果

2) 実技試験後の自己評価

期末実技試験直後に自己評価した記録から、中間に比べて、客観的に原因から評価できた学生が19%から36%へと、2.5倍近くに増えた。

3) 根拠と方法のセット記述

講義後、学習した内容をまとめる根拠と方法をセットにして書ける適切率が、初回の72%から最終回は100%まで上昇した。

4) 発話ラベルの出現頻度とセット記述との関係

プレ演習中に4ラベル(生成・根拠・質問・評価)全てを発話できた84%の学生は、その後のセット記述の適切率が高く、4ラベル全てを発話できなかった学生16%のうち、適切にセット記述できた割合は11%に留まった。

5) プレ演習課題に対する正答率

前期の正答率は53%、後期は44%であった。

6) 類推

プレ演習時に、既習項目から類推する場面が、前期では1、後期では13場面に見られた。

7) 筆記試験得点率

プレ演習項目と他の項目とで、筆記試験の得点率を比較した結果、差は5%以下であった。

8) 全学習内容に対するプレ演習内容の割合

プレ演習内容は、「介護技術」全体の13%であった。

5. 考察

プレ演習において、自由に意見を述べ根拠に基づいて吟味し解決する過程は、介護者役だけでなく利用者役などの視点から意見を出し合うことで、解に対する客観性が高まった。実際、見たこともない物品を使用することによる知的好奇心ベース

の試行錯誤活動、生活経験や既有知識に根差した多様な根拠・方法の提案、ロールプレイでの観察結果に基づいた帰納的推論など、技術と根拠を能動的に結びつける協調活動が観察できた。さらに、後期には、既有知識を類推のベースとする言動やメンバー間の役割の交代も見られ、プレ演習の経験回数と既有知識の増加による協調活動の変容が観察できた。

プレ演習で何が起きていたのかをICレコーダーの記録から分析すると、規範的な介護方法を提案できた割合は50%(11回平均)に留まったにも関わらず、そこでの協調活動は、正解に達するためというよりも、自由に意見を述べ根拠に基づいて方法を提案・吟味するといった介護アセスメント力の獲得につながる活動が起きていた。このような活動を体験したことが成績の向上につながったと考えられる。

介護技術は、複数の行為を組み合わせ全体として構成される。プレ演習の課題は、構成されている技術の中の2,3行為と、全体の約13%を対象とした。プレ演習では、各技術のコアとなる行為を吟味することで、その技術全体を習得する効果を得て、その学習効果がプレ演習以外の技術項目についても、介護アセスメントのメタ認知的習慣がつくなど、波及効果があることが確認された。

6. まとめ

プレ演習で一番大事なところだけでも方法の根拠から考える活動をしておくことで、介護アセスメントのメタ認知的習慣が付きやすくなり、基本介護技術の習得度が向上したといえる。

参考文献

- [1]三宅なほみ, (2007) “ 学び方を学ぶ工夫としての協調学習～その理解的背景と具体的な実践例 ”, 日本語教育年鑑, 独立行政法人国立国語研究所 (編), pp.5-19.
- [2]武田啓子, (2008) “ 基本介護技術習得の学習過程 - 導入時の授業デザインを工夫して ”, 日本認知科学会第25回大会発表論文集, pp.146-151.